Library

第 59 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部図書館
平成 21 年 3 月 31 日

CONTENTS

ささえ　繊維学部図書館長　高須　芳雄　(2)

神紋から信濃の国の成立を考える　太田　和親　(4)

科野大宮の碑から上田の歴史を考察　太田　和親　(9)

Column　科野大宮さんの御神木の高さ？　太田　和親　(17)

図書館通信　告知板　(18)

図書館日誌　(19)

編集後記　(19)

Library（電子版）はｲﾝﾀｰﾈｯﾄで提供しています。URLはこちら↓です。

http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/textiles/libnews.html

図書館のホームページが新しくなりました！

ささえ

繊維学部図書館長　高須芳雄

インターネットの普及によって情報入手が容易になるとともに、大学図書館の存在意義はが益々高まっている。大学情報センターと大学図書館との連携が進んでいることを言っているのではない。学生の勉学には、書籍を読むことが重要であることを強調したいのである。書籍には「体系的説明」があり、その著者の「哲学」がある。膨大なインターネット情報とその利便性のあまり、インターネット利用者は、ともすれば断片的な理解で済ませがちになる。将来を背負って立つべき若者には、著者が明確な書籍を熟読あるいは通読する習慣をつけさせたい。教員は、授業や卒論・修論・博論の研究指導において、学生がそうせざるを得ないように指導すべきである。今それが疎かになっているような気がしてならない。

三年前に繊維学部図書館長を拝命し、その任期が終わるこの三月に私は定年退職することとなった。退任するにあたり、図書委員会が関わった主要な事項の概要を下記の形で報告させていただく。いくらかの「成果」なるものは、繊維学部教職員のたゆまざるご指導とご鞭撻によるものである。とりわけ図書館充実・増築の必要性を謳っておられる学部長、図書館職員、図書委員の各位には、計り知れないほどお世話になった。ここに衷心より感謝申し上げる。

１．学生を対象とした繊維学部図書館利用に関するアンケートの実施と活用

図書委員の努力によって、64%（951 名）という高い回収率。開館時間の延長、照明の改善、参考図書の充実など、さまざまな提言。その後、多くの要求が実現。

２．学生の図書館、図書利用の促進

繊維学部学生一人当たりの年間借り出し書籍数がさほど多くはない現状を打破するため、学生の図書館利用の促進を教員にも依頼。今年度は一人当たりの借り出し図書数は微増。

３．学生参考図書の充実

従来から行っている各学科推薦の学生参考図書に加えて、シラバスに掲載されている参考図書の複数冊整備、繊維学部教員が執筆した学生向け参考書籍の整備（寄贈歓迎）などを実施。今後、学生にとって魅力的な参考書の整備や利用の便宜（重要図書の設置冊数の適正化）など、総合的な検討が必要。

４．図書館オリエンテーションの実施

年間二十数件の研究室向けオリエンテーションおよび機能機械学科２年次生オムニバス授業と文献データベース「JDreamⅡ」説明会を図書館職員が実施。

５．文献検索エンジンと電子ジャーナルの充実

Web of Science の導入をはじめ、米国物理学協会、米国物理学会ならびに米国化学会が発行する主要論文誌等々の電子ジャーナルを全学経費により契約し、全学で活用。繊維学部の長年の努力の結果であり、自負してよい。全学の教育研究活動に不可欠。

６．信州大学機関リポジトリの構築

国内外からのリポジトリへのアクセスは非常に多い。研究論文だけでなく、各種研究資料の掲載も視野に入れて、大幅に充実させることが必要。

７．研究者総覧の改善

各教員が入力できるようになっただけに、更新されていないものが目立つ。受験生や学内外関係者に対する「顔」「メッセージ」であり、各研究グループのホームページの充実と併せた取り組みが必要。

８．修士論文の扱い

修士論文の著作権、アイデアの熟成度、特許出願などとの関係で、図書館では５年間は原則非公開とし、許可あるものについてのみ閲覧可能とした。研究室での対応は別。

９．貴重資料の充実と展示

松本市在住の実業家池田六之助氏より染織関係の多数の図書を寄贈いただいた。昨秋の繊維学部「第１回ホームカミングデー」において、当該資料の一部と繊維学部図書館所蔵の貴重資料の一部を講堂に展示。本年度末には、定年退職なされる榎本裕嗣教授より繊維をはじめとする多数の貴重な古書と資料を寄贈いただいた。このほかにも学内外の方々から、各種専門書、啓蒙書類の寄贈がある。感謝。

10．貴重図書の整備

繊維学部創立100周年事業の一環として学部内の貴重資料の補修・整備の企画案を、学部長および関係者に提出。一部実現の方向。

以上

神紋から信濃の国の成立を考える

随筆平成 17 年 5 月 6-8 日
信州上田市在住　太田和親

私は、昨年五月から今年の五月までの丸一年間、上田市内の神社仏閣を全て見て回ろうと訪ね歩いてきました。あと数ヶ所を残すのみとなりこの五月中に目的を達成しそうです。これで満願成就ということになりますが、来年三月には上田市は周辺の真田町、丸子町、武石村と合併して新上田市になる予定ですので、また当分それらの新しい地域を回ることになりそうです。しかしこの一年間現上田市をくまなく歩いて神社仏閣を訪ねていて、大変面白いことに気が付きました。特に神社ですが、神社の屋根や本殿の懸魚（げぎょ）の上の辺りに、その神社神社に特徴的な神紋がついていることでした。私はそれまで家紋というのは知っていましたが、神社やお寺にも、それぞれ神紋や寺紋があることを初めて知りました。

神紋は神様の系統系譜を表したものです。例えば梶紋（カジモン）が付いていれば、その神社は諏訪系と考えてよいそうです。上田市の神社には、梶紋の付いた神社が沢山あることに気が付きました。その諏訪系の大本の諏訪大社の神様は建御名方命（タケミナカタノミコト）です。建御名方命は大国主命（オオクニヌシノミコト）の息子です。そして建御名方命は「当国開闢（かいびゃく）の神」であると市内のいくつかの神社の由来に書かれています。つまりこの信濃の国を最初に開いた神様ということでしょう。したがって梶紋の付いた神社が上田に多いということは、この地域を最初に開いた偉大な指導者である建御名方命を上田でも大変崇敬しているということを表していると考えられます。上田市内に沢山ある梶紋の付いた神社の名前は、諏訪大社の末社と考えられ名前がそのままの諏訪神社・諏訪宮となっているもの以外にも、名前が違っていても梶紋がついているものが沢山あります。私が実際に訪ねて梶紋がついていることに気付いたものを下に全て挙げてみます。

「上田市内で梶紋のついた神社のリスト」

諏訪神社（蒼久保）
諏訪宮（木之郷）
畑山（はたやま）神社（上野区畑山）
足嶋（たるしま）神社（上野区五中近く）
柏山武事神社（住吉区大久保）：梶紋+五三の桐
東條健代神社（住吉区宮山）
生塚（うぶづか）神社（常磐城＜ときわぎ＞）
大星神社（中央北三丁目）：市内で二番目に氏子数が多い神社
科野（しなの）大宮（常田二丁目）：梶紋+五三の桐、一番氏子数が多い神社
英神社（古里区染谷）：梶紋+菊紋
国露津穂神社（国分区黒坪）
堀川神社（国分区下堀）：御柱祭あり

古家神社（踏入区）
弓立神社（築地）
諏訪神社（仁古田）
塩野入神社（舞田）：当国開闢の神＝建御名方命の立札あり
塩野神社（保谷）
山田神社（山田）：梶紋+菊紋
生島足島（いくしまたるしま）神社（下之郷）：御柱祭あり

このリストで注目されるのは、梶紋のついた神社の中で、堀川神社と生島足島神社には諏訪大社と同じく小規模ながら「御柱（おんばしら）祭」を行っていることです。したがって、お祭りからもこれらの神社は諏訪系の神社であることを如実に表していることがわかります。神紋の梶紋と符合しています。諏訪大社の御柱祭は大規模で全国的に有名ですが、信州では他にも各地に小規模ながら「御柱祭」が沢山あります。信濃の国の中で、他に一体いくつの神社で御柱祭が行われているのでしょうか。過去に行っていたが今は途絶えてしまったもの、現在も行われているもの、全てを調べ上げると、民俗学的に大変興味深いものと思われます。さらに調査範囲を広げて、「御柱祭」は行っていないが、神紋が梶紋であるという神社は、信濃野国の中で一体いくつあるのでしょうか。正確な数はわかりませんが、最近市立図書館で、信濃国の神社で梶紋の神社は約三割あると、家紋の研究で著名な本に書いてあるのを、みつけました。日本の他の地域ではそんなことはないそうです。ほとんどない所の方が多いそうです。つまり、信濃の国は「梶紋」＝諏訪勢力の一大中心地であったということを意味しているようです。

建御名方命の父は大国主命（オオクニヌシノミコト）で、出雲大社の御祭神であることは有名です。古事記や日本書紀によれば、父の大国主命と兄の事代主命（コトシロヌシノミコト）は、大和朝廷系の天照大神勢力に出雲の国を譲れといわて、無抵抗で承諾しました。しかし、建御名方命だけは、最後までうんと言わなかったので、最後に相撲で勝負して決めようということになり相撲で勝負したところ負けてしまい、信濃の国の諏訪まで逃げて来ました。ここから出ないから、もう私をこれ以上攻めないでくれということになり、諏訪に落ち着いたということです。きっとこれは建御名方命だけが、武力で抵抗したが最後には降参して、諏訪まで逃げたということでしょう。建御名方命のお母さんの奴奈川姫（ヌナカワヒメ）は越後（現新潟県）の出身だったので、こちら方面につてを頼って出雲から逃げてきたということでしょう。越後ではまだ危険だったので、さらに山の中の信濃の方面に逃げて最終的に諏訪に落ち着いたというのが真相だと思います。越後から千曲川（＝信濃川）を遡ってきたのでしょう。上田市内の加美畑（かばたけ）神社の由来および生島足島神社の由来によると、建御名方命が出雲から中信の諏訪に移住する途中、上田市内の加美畑神社の地にまず一時的に滞在し、次に生島足島神社の地に滞在して、これらの地域に、農業と養蚕を教えたと言われています。そして生島足島神社から中信地区の塩尻に行き、最後は諏訪に落ち着いたそうです。塩尻から、諏訪に来るとき、原住民の守矢（もりや）氏の勢力と岡谷の辺りで戦ったという記録が、諏訪神社に伝わる「諏訪絵詞（すわえことば）」に載っているそうです。最終的には原住民の守矢氏と融和し諏訪地方は安定します。そのため諏訪神社は上社と下社に分かれ

て、それぞれ祭事は縄文的なものと弥生的なものとに分かれているのが特徴です。守矢氏は上諏訪神社を祀り、その祭事は鹿の頭を供えるなど狩猟採集時代の縄文の伝統を色濃く残し、江戸時代までその祭事は実際に行われ続けていたそうです。その神長官（じんちょうかん）の家系の守矢家当主は現在７８代目です。一代３０年とすると二千三百年も続く家系となります。おそらく日本で一番古い家系でしょう。天皇家よりも古いものと思われます。下諏訪神社の方は稲作系の伝統を表わした祭事を行い、代々金刺家がその祭事を担当していたようです。金刺家は大祝(おおはふり）の家系で、後に源平の合戦の時木曽義仲の重臣として活躍する手塚太郎金刺光盛は、金刺家の出身で諏訪から上田の手塚に移り住んだ人です。このように、建御名方命は出雲を出て、越後から千曲川を遡り、上田、塩尻を経て諏訪に行き定住したことがわかります。その時が信濃では、縄文時代が終り弥生時代が始まった時期となります。縄文時代には国の概念がなく原住民が各地に盤踞している状況ですから、建御名方命が来て初めて国としてまとまり信濃の国が始まったということです。それで建御名方命が当国開闢の神として今も崇敬されているのだと考えられます。因みに、建御名方命の子の興波伎命（オキハギノミコト）は諏訪を出て佐久に行き佐久地方を新たに開発した神として、佐久市臼田（旧臼田町）の新海神社に祀られて崇敬されています。

このような歴史上の状況がわかったので、もう一度上の方で示した「上田市内で梶紋のついた神社のリスト」を見て下さい。科野大宮の神紋が梶紋+五三の桐となっています。科野大宮の御祭神は大国主命と事代主命であり、上に述べたように出雲・諏訪系統と見なしてもよいわけですから、その神紋が梶紋であるのは納得がいきます。しかし、拝殿屋根瓦には五三の桐が付いているのに大変疑問を感じます。そんな折、上田高校の正門の屋根瓦を見ていましたら、何と五三の桐が付いていました。上田市民にはよく知られていますが、上田高校が今ある場所は元上田藩のお殿様の屋敷でその門がそのまま残っていて、現在も上田高校の正門として使われています。とても歴史を感じる高校で、この正門には上田高校生や卒業生は大変誇りにしており、卒業式の時は必ずこの正門をバックに写真を撮ります。この江戸時代の殿様の屋敷の門の瓦屋根上部に五三の桐が付いているのは、当然といえば当然です。それは上田のお殿様が松平家でその家紋が五三の桐だったからです。そこで、科野大宮の拝殿の屋根瓦上部に五三の桐がついているのは、幕末に社殿を建て替えたときに、上田の殿様の松平氏がその費用を全額出したそうなので、スポンサーに敬意を表して、松平家の家紋を付けたものと考えられます。しかし拝殿の裏の本殿社（やしろ）の屋根、懸魚（けぎょ）の上にはちゃんと梶紋がついています。また拝殿前の大きな石の水鉢一対にはそれぞれ諏訪梶紋が付いています。毎年十月のお祭りの時には拝殿に幔幕が張られますがその幕にも諏訪梶紋が付いています。したがって、本来は梶紋であることがわかります。目に付きやすい屋根の上に五三の桐がついているということは、やはり今も昔もスポンサーは大切にされるということでしょう。

因に真田町の延喜式内神社、山家（やまが）神社の拝殿屋根には何と三種類の違った家紋が付いています。左から五三の桐（松平家）、六文銭（真田家）、永楽通宝（仙石家）となっています。この地域を支配したお殿様は戦国時代から幕末にかけて、真田氏→仙石氏→松平氏と変わりましたが、山家神社はそのつどお殿様から厚く崇敬され全て

の費用がそのお殿様によってまかなわれていたそうです。山家神社の主祭神は、科野大宮と同じ大国主命ですので「梶紋（諏訪系）」か「二重亀甲に花菱（出雲系）」のはずですが社殿には私の見たところ梶紋や二重亀甲に花菱は何処にも見当たりませんでした。山家神社は水害や火災で今までに何度か建て替えられているので、その際にスポンサーのお殿様の家紋を社殿の上に掲げたものと考えられます。それで三つもあるのでしょう。このように山家神社でも、科野大宮とほぼ同じ状況が神紋や家紋から読み取れて大変興味深いです。

もう一度「上田市内で梶紋のついた神社のリスト」を見て下さい。英神社（古里区染谷）と山田神社（山田）では梶紋+菊紋となっています。大変異様な感じがします。上述の説明から判るように、もともと出雲・諏訪勢力と天照・大和朝廷勢力とは、敵対関係であったはずです。その両方の勢力を表わした梶紋と菊紋が一つの神社の屋根の上に並べて掲げられるということはどういうことなのでしょうか。私は次のように考えています。明治の世になってから王政復古したため、時の政治勢力の主流は再び天皇家となり、国家神道として伊勢神宮がその本流と見なされるようになりました。そのため、各地の氏族の氏神は国家統一に邪魔になったものと思われます。そこで、明治時代に合祀令が出されて多くの氏族の氏神は廃止され、村に一つの神社ということでまとめられてしまいました。神社は、血統上の氏族単位ではなく行政上の村単位にされたのです。その中で郷社、村社、県社などという格付けがされました。私の郷里讃岐国には私の家の氏神である太田神社がかつてあったのですが、明治時代の合祀令によって廃止され村社に統合させられてしまいました。私の曽祖父の頃の話です。私の父は大変残念がってもと太田神社があった場所、今は田んぼになっている所に私を連れていってくれたことを思い出します。当時この合祀令に抵抗することはかなり困難であったようです。そこで、上田市内にある英神社（古里区染谷）と山田神社（山田）では、廃社されるのを回避する方法として、天皇家の御祭神の天照大神も合せて祀ったのではないか、そのため本来の梶紋に菊紋も合せて付けたのではないかと想像されます。柔道の合わせ技みたいですね。皆さんはどう思われますか。なお、戊辰戦争の頃、「菊は咲く咲く葵は枯れる（＝天皇家が興り徳川家は滅びる）」と当時の政治状況を紋章を通して歌われたそうですが、それより２０００年ほど前には、「菊は咲く咲く梶の葉枯れる（＝天照大神・大和朝廷が興り出雲・諏訪勢力が滅びる）」という政治状況があったものと考えられます。その舞台の中心が、出雲と信濃だったのです。

ここで梶紋ではないのですが、大変注目される神紋があります。上田市の隣に小県（ちいさがた）郡青木村があります。その青木村に子檀嶺（こまゆみ）神社があります。小県郡には延喜式内神社は五つありますが、子檀嶺神社はその一つで大変古い神社です。この神社の神紋は「二重亀甲に花菱」で出雲大社の神紋と全く同じで、出雲系であることを表わしています。御祭神は、木俣（こまた）神で、大国主命の最初の子です。コトシロヌシやタケミナカタのお兄さんに当たる人です。この神紋から考えると、梶紋より古くからここに出雲から来て定着したのではないかと想像できます。タケミナカタノミコトが来る前に、既に出雲から少しずつ先にこの地へ逃げてきていた出雲勢力があるのではないかと私は考えています。そこで大変注目されるのは、上田市から千曲川下流の長野市豊野地区に延喜式内神社の伊豆毛（いずも）神社があることです。信州に古くか

らイズモという名前の神社があったのです。縄文時代から弥生時代に移り変わる大変革期に、出雲から信濃へ移動があった歴史を証明できる神社ではないかと考えられます。以上のように、通常教科書で習わない信濃国成立の歴史が、神紋から読み取れ大変興味深いです。

最後になりましたが、是非皆さんにもう一つ知ってもらいたいことがあります。科野大宮の鳥居の横に、「科野大宮の碑」と書かれた大きな石碑が建っています。その石碑にも縄文時代から弥生時代に移り変わる大変革期の歴史を彷彿とさせる大変興味深い故事が書かれています。しかし現在上田市民にさえその故事はほとんど知られていません。大変面白いものです。別稿「科野大宮の碑から上田の歴史を考察」で論考していますので、是非合せて読んでみて下さい。これらは信濃の国の成立、ひいては日本の国の成立について大変考えさせられます。

科野大宮の碑から上田の歴史を考察

随筆 2004 年 7 月 14-16 日
加筆修正 2004 年 9 月 8-9 日
信州上田市在住　太田和親

信州上田市にある科野（しなの）大宮さんは、上田市で最も古い神社のようです。創建は 2100 年くらい前のようですが、いつ頃建てられたものかはっきりしないそうです。そこで、神社の境内にある石碑を最近読んでみました。この碑文には、信州の歴史や日本の国が成立した当時のことが書かれており、本当に面白いものです。この碑文から上田の歴史、ひいては信州の歴史について、非常に考えさせられました。碑文の原文は難しい漢文書き下し文ですので、後の方で詳しく解読しています。後でじっくり読んでみて下さい。まず、ここでは、その碑文に出てくる古須波という地名と古代に上田に遷都しようとした歴史を見てみます。

（1） 古須波考

まず、科野大宮の碑には大変驚くべきことが書かれています。この上田の大宮さんがあった土地を「古須波」、すなわち「こすわ」と言ったとあります。漢文を書き下すときにこうなったので、「古須波」は「いにしえはすわ」と読むのかもしれません。つまり、昔はここを「すわ」といったという意味なのかもしれません。どちらにしても、この地は「すわ」と呼ばれていたのです。長野県で、「すわ」といえば御柱（おんばしら）祭の諏訪ですよね。この現在の中信の諏訪より古い「すわ」が東信の上田にあったということになります。そこで上田市内で現存する「すわ」という地名を調べて列挙してみると 1）諏訪形、2）諏訪部、諏訪泉神社、諏訪部橋、3）上須波橋、下須波橋（市内矢出沢川に架かる）、４）古須波、須波ヶ岡（科野大宮さんのある土地の古名）と、以上４ヶ所にあります。またその後、郷土史「富士山村の歴史」という本で知ったのですが、10 世紀に作られた「和名類聚抄」によると、信濃国には十郡があり、その内の小県（ちいさがた）郡は、さらに八郷に分れていたそうです。その八郷は、童女（おうな：旧東部町）、山家（やまが：現真田町）、須羽（すは：現上田市の千曲川北岸一帯）、跡部（あとべ：現青木村）、安宗（あそ：塩田平南部一帯）、福田（ふくだ：塩田平北部一帯）、海部（あまべ：現丸子町）、餘部（あまるべ：現武石村+現和田村+現長門町）だったそうです。従って、10 世紀頃までは、上田旧市街地一帯は須羽（すは）郷と呼ばれ、上田の地にかつて「すわ」という地名が、実在したことを知りました。

しかし、一体、「すわ」という言葉はどういう意味なのでしょう。インターネットで調べてみると、【「諏訪」は広く大勢に相談し物事を決める事】を意味するそうです。合議制で村や集団の政治をするということなのでしょう。また、海野宿に在住の郷土史家宮下なほ子氏によると、スワは何とスワヒリ語で、川岸が崖になった場所をいい、船着き場に利用された所だとのことです（2004 年 9 月 4 日聞取）。上田城の下に崖がありますが、昔はこの崖の真下を千曲川が流れていて、尼ヶ淵と呼ばれていました。この

ような所を「スワ」というのだそうです。「すわ」という地名がこの意味だと、このあたりを代表する目印（ランドマーク）は尼ヶ淵だったに違いなく、推定旧名の「すは」は、地形と地名がぴったりとなります。こっちの方が、納得がいきます。

さて、上田市内の諏訪部の高橋近くに有る標札によると、ここ上田に、最初に来た弥生人は、諏訪族だったそうです。今から 2100 年ほど前、縄文人が住んでいたここ信州に、初めて弥生人が来て入植した。その人たちは諏訪族で、氏神を祭るため神社を建てた。科野大宮の碑文と考えあわすと、諏訪族が建てた神社が科野大宮の前身だということになります。神社というのは、今は余り現代人は意識しませんが、上田市内の神社を回っていると、集落ごとに、必ず神社が建っていることに気付きます。その神社の名前は必ずその集落の名前あるいはその集落の有力氏族の名前が付いています。従って、稲作をして定住生活をする弥生人にとって、土地の神様を祭り氏族の祖先を祭り集落が安寧に暮らせるように祈る、精神的支柱としての場所が、集落ごとに必ず必要だったに違いありません。明治時代から大正時代にかけて合祀令というのがありました。これは、明治 39 年制定され、全国の神社を無理やり半減させた悪法で、南方熊楠が大反対したので、後の大正 7 年に廃止された法令です。2004 年 7 月 21 日放送の NHK「その時歴史が動いた“世界遺産熊野の森を守れー南方熊楠・日本初の自然保護運動ー”」にも取り上げられました。この合祀令以前は、全国的にそれこそ集落ごとに必ず産土神（うぶすながみ）や氏神を祀る神社があったのです。従って、科野大宮は、約 2100 年前に諏訪族が建てた神社で氏神をまつったものがその前身と考えられます。

そしてこの科野大宮の祭神が出雲出身の大国主命（オオクニヌシノミコト）とその長男の事代主命（コトシロヌシノミコト）であるというのも意味深長です。中信の諏訪大社の祭神は、大国主命の次男の建御名方命（タケミナカタノミコト）です。上田市内の加美畑（かばたけ）神社の由来および生島足島（いくしまたるしま）神社の由来によると、タケミナカタノミコトは出雲から中信の諏訪に移住する途中、上田市内の加美畑神社の地にまず滞在し、次に生島足島神社の地に滞在して、これらの地域に、農業と養蚕を教えたと言われています。科野大宮の碑文から考えると、この弟のタケミナカタノミコトが加美畑に来る前に、既に兄のコトシロヌシノミコトや父のオオクニヌシノミコト、あるいはその勢力下の人々が、上田市内の「こすわ」に来ていたのではないかと、私は考えています。オクニヌシノミコトら出雲の勢力が中信の諏訪に移住してきたのは、天照大神 （アマテラスオオミカミ）系の天孫民族に、つまり大和朝廷勢力に攻められて、出雲から逃げてきたためです。古事記と日本書紀の前半部分にこれらのことが書かれています。これらの物語は、神話と呼ばれていますが、日本列島が縄文時代から弥生時代に変わっていく大混乱期のさまざまな人々の記憶を記録したものだと私は思います。中国から文字も暦も入っていない時代なので、年代は正確とはいえないが、人々の忘れられない大事件の記憶を何百年も後に記録したもので、多くは本当のことだと思います。従って、大和朝廷勢力に追われた出雲の勢力は、未だ大和朝廷勢力に屈していなかった信州を目指して逃げてきたのに違いありません。上田の科野大宮の前身は、そのような時期に最初に出雲から来た集団、諏訪族、によって作られた神社と考えられます。それでこの地を「こすわ」といい、祭神が出雲出身のオオクニヌシノミコトとコトシロヌシノミコトとになっているのでしょう。彼等は縄文文化圏の人たちだったのですが、既に

農業や養蚕という弥生のハイテク技術を身に付けていて、心情的政治的には縄文人でも生産手段は既に弥生系になっていたと想像されます。それで、政治亡命的にいまだ縄文文化圏の信州に逃げてきたのですが、弥生文化の農業や養蚕を、加美畑（かばたけ）などの滞在地でその土地の人たちに教えたということなのだと思います。正に縄文時代から弥生時代に移行する丁度その時だったからといえます。従って、諏訪族は縄文人であり弥生人なのです。現代風に言えば縄文系弥生人ということになりますか。「すわ」族は信州に弥生文化をもたらした最初の人たちで、上田の「こすわ」が信州で最初の移住地といえるというのが私の結論です。諏訪市の「すわ」はその後遅れて亡命してきた弟のタケミナカタノミコトの移住地です。従って、科野大宮は諏訪大社よりも古いと考えられます。

科野ノ国の初代国造（くにつくり）つまり県知事は、科野大宮の碑によれば、タケイホタツノミコト（建五百建命）ですが、この人物が大和朝廷に人選されたことも、大変意味深長に感ぜられます。何故かというと、タケイホタツノミコト（建五百建命）は、出雲系の大国主命の娘イスケヨリヒメ（伊須気余理比売）と大和朝廷系の神武天皇との間に産まれた子カムヤイミミノミコト（神八井耳命）の孫です。これは、出雲系の科野ノ国を反乱させないにように治めるには、出雲系の血も入っており、大和朝廷系の血も入っていて、どちらからも好都合だったからでしょう。このような血筋と、上に既に述べた科野ノ国の成立の歴史があるからこそ、この人タケイホタツノミコト（建五百建命）が初代の県知事になったのだと考えられます。

因に、タケイホタツノミコト（建五百建命）の父は、タケイワタツノミコト（健磐龍尊）という人で、この人は祖父神武天皇の勅命により、山城国の宇治から阿蘇に下って阿蘇一帯を開拓して治め、鎮西鎮護の大任を果たしました。それでその息子のタケイホタツノミコト（建五百建命）が阿蘇から科野に赴任して来たとき、一緒に来た阿蘇の人々が、現上田市の塩田平を開拓して住みました。ここは現在も「古安曽（こあそ）」という地名として残っています。10 世紀に作られた「和名類聚抄」によると、安宗（あそ）郷といわれていた地域の中にあります。この「古安曽（こあそ）」には安曽神社がその時からずっと建っています。古安曽（こあそ）に、阿蘇出身の人々が建てた安曽神社があり、古須波（こすは）には、諏訪族の人々が建てた科野大宮が建っているということで、それぞれ創建時に共通の状況が見て取れて面白いですね。これらははるかな古代の 2000 年から 2100 年前のことなのです。歴史的なロマンを感じます。

（２） 上田遷都考

次に、ここ上田に遷都しようと天武天皇が考えて２人の使者を送って上田の科野大宮の土地を調査させたということが、大変注目されます。そんな史実があったことを私はこの石碑を読んで初めて知りました。二十年以上も上田に住んでいて、誰からもそんな上田遷都計画があったなどと聞いたことがなかったので大変驚きました。皆さんは知っていましたか。

しかし、大変疑問に思うことがあります。何故天武天皇はこの時期に、辺鄙な信濃へ遷都を考えたのでしょう。多分、私だけでなく多くの人が疑問に思うと思います。私は次のように考えています。663 年に「白村江の戦」で日本・百済連合軍は、唐・新羅連

合軍に大敗し、百済は滅亡しました。このような国際情勢から、唐と新羅の本土侵入を恐れた結果、防人（さきもり）を置き水城（みずき）を築いて、日本は防衛努力をしました。また、当時は中央豪族の政治への干渉が激しい時期でもありました。実際に天皇が有力豪族に暗殺される事件もあったのです。従って、恐らく、壬申の乱（672 年）で勝利を収めて皇位に就いた大海人皇子（＝天武天皇）は、この国土防衛のためと、中央豪族達の政治干渉を避けるため、九州や近畿から遠い信濃に遷都しようと計画したのではないかと考えられます。また、壬申の乱前、大海人皇子は辺鄙な吉野山中に逃れていたので、辺鄙な信濃山中にも余り抵抗がなかったのでしょう。

また当時吉野のくずびとは、縄文人の末裔だという意識があり、弥生系の天孫人とは、人種が違っていたと考えられていました。お前は人間の「くず」だということを今も言いますが、これは本来人種差別用語であったといわれています。くずびとは、平安末期まで、お正月には京の都に出てきて、宮廷で踊りを奉納する習わしがあったことが、平家物語に出ています。おそらく、源平の合戦の頃までは、くずびとは朝廷に恭順の意を示すために、毎年そうしていたのでしょう。そういえば、和歌山の人や奈良県南の吉野山系の人々は今も、顔が他の近畿の人の面長と違って、えらが張って四角い顔をしている人が多い気がします。信州人の顔やアイヌ人の顔によく似ています。吉野の人も信州の人も縄文系だったのでしょう。南北朝の時代までは、日本が乱れると、吉野に逃れたり、信州に逃れたりすることがあったのは、縄文系の人々が住んでいる土地は元々、中華王朝で言う「化外（けがい）の地」という意識があったのではないかと思います。化外の地とは、未だ王朝の支配が完全には及んでいない土地という意味です。さらに中華王朝では西洋にはない「柵封制度」というのがあり、完全に支配はしていなくても、毎年都に朝貢して来て恭順の意を示していれば、そこも一応完全ではないが王朝の支配下にあると見なすというものです。1874 年沖縄の漂流民が台湾の蛮族に殺害された事件の後、賠償交渉に臨んだ大久保利通に向かって、清朝は台湾は化外の地だから責任はないと言って、賠償金を最初支払おうとしなかったそうです。このようにほんの 100 年ほど前まで「化外の地」や「柵封制度」という政治概念が東洋にはあったのです。そこで、日本でもおそらく平安末期まで、吉野はこの柵封の下にある化外の地という意識が、京の朝廷には漠然とあったのでしょう。国境や国民などという政治概念は西洋と東洋でかなり異なっていたことがわかります。

さて、首都を信州に移す計画というのは、この天武朝の時だけではありません。それから 1360 年後の太平洋戦争の時、信州松代の山中に長大なトンネルを掘り、ここに天皇をお移しして戦い抜くということを計画していました。実際に天皇陛下用の部屋、つまり御所をトンネル内に造っていたのです。敗戦になり松代大本営の計画は実現しませんでした。興味深いことに、二つの計画とも外国との戦争の時に、信州に遷都しようとしていたことがわかります。

以上、古須波という地名と古代に上田に遷都しようとした歴史を見てきました。私はこのようなことを、上田に住んで二十年以上になりますが全く聞いたこともなく、知りませんでした。大変興味深いことで、本当に色々考えさせられました。その他にも大変興味深いことが、「科野大宮の碑」には宝石のようにちりばめられて書かれています。そこで、以下に、この「科野大宮の碑」の原文を皆さんと読んでみたいと思います。

しかし戦後生れの私には、とても難しくて解読に大変往生しました。漢文の書き下しというだけでなく、使われている平仮名が、平家物語の頃に使われていたような歴史的なもので、馴染みが殆どないためです。例えば、「な」は「奈」を崩したもの、「し」は「志」の崩したもの。このあたりならまだ想像が出来ますが、元の字が想像できない「の」、「を」、「と」の変体仮名が随所に使われていて、もう戦後生れの人にはすらすら読めるというものではありませんでした。大正五年生まれの亡父が戦前の満州時代に書いた手紙が沢山、最近になって親戚の家から出てきて、私に譲られました。これらの中にこのような変体仮名がよく使われていて、大変苦労してやっと読みました。私は昭和二十七年生れで戦後教育を受けたものなので、歴史的仮名遣いなどにはなじみはありませんが、そのようなことをかすかに覚えている最後の世代かと思われます。もっとのちの戦後の生れの人には多分完全にお手上げのように思います。そこで、私が何とか読み取って現代の仮名に改めた科野大宮の碑文を下に示します。読んでみて下さい。

「科野大宮の碑」の原文

科野大宮の碑　　大勲位彰仁親王　篆額

崇神天皇の七年詔して国ツ社を定めたまふ科野ノ国造建五百建命令を奉じて大己貴命事代主命を祀る社を創建して以て当国鎮護の社となす爾来国造県主租賦を奉じて以て祭を修む科野は後信濃と改めたりしも社に科野と号するは其の旧を存せしなり常田は古須波と稱す社の地高く平かにして傍らに国衙あり故に須波ヶ岡と号し又国衙台と曰ふ天武天皇十三年都を科野に遷さんと欲す小紫三野王小錦下采女朝臣筑羅を遣はして地形を相せしむ二人岡に至り圖を製し社に祈る果して吉なり還りて奏し為に神戸を置く其の社を摂する六所と曰ふ国司祀典を修む文治中常田は八須波條院璋子内親王の荘田たり故に常田の荘と稱す内親王華表を山上に建つ社を距ること南三百歩ばかり鳥居場と稱するは旧址なり康安二年二月鎌倉管領足利基氏彗星を祓除す其の書科野大宮と記す大宮の稱たる已に久しきなり旧記に云く社域南北八丁東西六丁と承平の乱将門兵を起す京に入らんと欲し道をここに取る他田ノ真樹は小県に国造たりし他田ノ大鴨の裔なり平ノ貞盛を助け将門を国衙台の下常田の河原に撃ちて大いに之を破る社域之が為に荒廃す享禄天文の間本郡の豪族上田常田海野真田の諸氏隣郡村上氏の族と封地を争ふ戦闘して止まず天正元年再び之を建つ真田氏徳川氏と數々戦うに及びて頽廃し復修むる者なし而して修理の費祭祀の料は盡く租賦に取る古例を修るなり毎年正月十五日藩主自ら奉幣の典を挙げ明治の朝に至りて廃す常田の諸氏其の事跡の煙滅せんことを恐れ余に請ひて梗概を叙し銅碑に鐫りて以て後に伝へしむと云う
明治二十二年十一月　枢密院顧問官正三位勲一等伯爵副島種臣撰

付記　この碑文はもと漢文を以て記され銅碑に刻まれていたが太平洋戦争酣なるに及び昭和十八年八月政府の銅鉄回収運動に応じて献納した今回有志相謀り再建の議成り広島大学名誉教授正四位勲二等文学博士手塚良道氏並にその門下文学士小林勝人氏を煩し国文に書き改め石に刻って長く伝えるものである

横関豊龍書　　藤澤群黄刻

（碑裏面）昭和三十三年四月二十九日建

以上ですが、皆さんすらすら読めて理解できましたか。漢文を国文に書き改めたものですが、それでも、私の勤めている大学の大学院生に見せましたが、難しくてよくわからないとのことでした。理科系の学生だからということもあるとは思いますが、一般的にわからないのが当然のような気がします。まず、句読点がなくどこまでが一文かわからないことや、読み方がわからないものや意味不明なものが沢山あります。そこで、下記に私が調べて読み方や注釈を付けたものを下に示します。

2004 年 6 月 4〜9 日太田和親調査
以下文中（　）及び[ ]は調査人注釈

科野大宮の碑　　大勲位彰仁親王[1]　**篆額**（てんがく）

（神代の話）
崇神（すじん）天皇[2]の七年（紀元前 91 年）詔して国ツ社（やしろ）を定めたまふ。科野（しなの）ノ国造（くにつくり）、建五百建命（たけいほたつのみこと）[3]令を奉じて、大己貴命（おおなむちのみこと＝大国主命の別名）、事代主命（ことしろぬしのみこと＝大国主命の長男）を祀る社を創建して以て当国鎮護の社となす。爾来国造県主（あがたぬし）租賦を奉じて以て祭を修む。科野は後信濃と改めたりしも社に科野と号するは其の旧を存せし（ぞんぜし）なり。

（飛鳥・白鳳時代の話）
常田（ときだ）は古須波（こすわ）と稱す。社の地高く平かにして傍らに国衙（「こくが」と読む：律令時代の県庁）あり。故に須波ヶ岡（すわがおか）と号し又国衙台（こくがだい）と曰ふ（いう）。天武天皇（672〜686 年在位）十三年（684 年）都を科野に遷さんと欲す[4]。小紫（こむらさき＝冠位[5]の一つ）三野王（みぬおう）、小錦（こにしき=冠位[5]の一つ）下采女朝臣筑羅（しもうねめあそんちくら）を遣はして地形を相（みさ）せしむ。二人岡に至り圖（＝図）を製し社に祈る。果して（はたして）吉なり。還りて奏し、為に神戸（かんべ＝祭祀の費用を賄う為の村落や土地）を置く。其の社を摂する（＝接する）六所（神戸となった所が六ヶ所）と曰ふ（いう）。国司祀典を修む。

（平安時代中期の話：もと＊の前にあったが年代順にするためここに移す）
承平の乱（＝承平天慶の乱）将門兵を起す（939〜941 年）。京に入らんと欲し道をここに取る[6]。他田ノ真樹（おさだのまき）は小県（ちいさがた）に国造たりし他田ノ大鴨（おさだのおおかも）の裔(すえ＝後裔＝子孫)なり。平ノ貞盛を助け将門を国衙台の下、常田の河原に撃ちて大いに之を破る。社域之が為に荒廃す。

（平安時代後期の話）
文治中（1185〜1189 年間）常田は八須波條院璋子内親王（＝八条院璋子内親王＝鳥羽上皇の皇女）の荘田たり。故に常田（ときだ）の荘と稱す。内親王、華表[7]（＝鳥居 ）を山上に建つ。社を距ること南三百歩ばかり鳥居場と稱するは旧址なり。

（室町時代の話）
康安二年（1362 年）二月鎌倉管領足利基氏彗星[8]を祓除（ばつじょ）す。其の書科野大宮と記す。大宮の稱たる已(すで)に久しきなり。旧記に云(いわ)く社域南北八丁(864m)東西六丁（648m）と。

（＊戦国時代の話）
享禄（1528ー1531 年）天文（1532ー1553 年）の間本郡（＝小県郡）の豪族、上田・常田（ときだ）・海野（うんの）・真田（さなだ）の諸氏、隣郡村上氏の族と封地を争ふ。戦闘して止まず。天正元年（1573 年）再び之を建つ。真田氏徳川氏と數々（しばしば）戦うに及びて頽廃し、復（また）修むる者なし。
（江戸・明治時代の話）
而して修理の費、祭祀の料は盡く（ことごとく）租賦に取る古例を修るなり。毎年正月十五日藩主自ら奉幣の典を挙げ、明治の朝（とき）に至りて廃す。常田の諸氏其の事跡の煙滅せんことを恐れ、余に請ひて梗概を叙し銅碑に鐫（ほ）りて以て後に伝へしむと云（い）う。

明治二十二（1889）年十一月　枢密院顧問官正三位勲一等伯爵副島種臣（そえじまたねおみ）撰

付記　この碑文はもと漢文を以て記され銅碑に刻まれていたが太平洋戦争酣（たけなわ）なるに及び昭和十八年八月政府の銅鉄回収運動に応じて献納した。今回有志相謀り再建の議成り、広島大学名誉教授正四位勲二等文学博士手塚良道氏並にその門下文学士小林勝人氏を煩し、国文に書き改め石に刻って長く伝えるものである。

横関豊龍書　　藤澤群黄刻

（碑裏面）昭和三十三（1958）年四月二十九日建

調査人詳細注釈

[1]この石碑上部の篆額（篆字による題名）を書いた「大勲位彰仁親王」は、皇族の小松宮彰仁親王（こまつのみやあきひとしんのう）のことです。弘化 3 年（1846 年）1 月 16 日に生れ、明治 36 年（1903 年）2 月 18 日に没しました。安政 5 年（1858 年）京都仁和寺の僧籍に入られましたが、慶応 3 年（1867 年）22 歳の時勅命により還俗し、同 4 年 1 月の鳥羽伏見の戦いに、征東大将軍として出陣しました。朝廷はこの軍に対し錦の御旗を授与して戦場に向かわせました。これにより、薩長軍は官軍となり幕府軍は賊軍となったのです。この時の品川弥二郎作詞・大村益次郎作曲の軍歌、「宮さん宮さん、お馬の前にひらひらするのは、何じゃいな。 トコトンヤレトンヤレナ。あれは朝敵、征伐せよとの、錦の御旗じゃ、知らないか。トコトンヤレトンヤレナ。」のトンヤレ節に出てくる宮さんこそ、この人です。因に、東京上野公園内の上野動物園前に、この宮さんの銅像があります。勿論お馬に乗ったお姿です。従って、この科野大宮の碑の篆額には、当時極めて有名で高貴なこの宮様に揮毫してもらっていたのですね。

[2]崇神天皇は第 10 代天皇で紀元前 97 年から紀元前 30 年までの 67 年間在位したことになっています。またの名を、「御間城入彦五十瓊殖尊　（みまきいりひこいにえのみこと）あるいは「御肇国天皇　（はつくにしらす）」といいます。この名前からわ

かりますように、国を始めた天皇ということになるので、この第10代の崇神天皇から実在の人ではないかと考えられ、それ以前は神話の世界の天皇と言われています。しかし、実在と言っても、67年間という極めて長い在位期間や119歳の長寿であったとかの記述は、ほとんど信じがたいものです。これは、何百年も後の日本書紀（720年）が書かれた奈良時代に、書記の漢人や韓人が年代を後から当てたからでしょう。従って、まだ中国から暦が入っていない時代のことで、年代は正確でないと言っていいでしょう。その為、上田市の教育委員会が作成した「科野大宮指定史跡の立札」の説明では、本石碑の説明とは異なり、この科野大宮がいつ頃出来たか不明としています。それでも、この神社が2000年近くの歴史が有る極めて古い神社であることだけは確かだと思います。もしそうだとすると、諏訪大社よりも古い可能性があります。

[3]このタケイホタツノミコト（建五百建命）が科野ノ国の初代国造つまり県知事ということになります。

[4]長野県上水内（かみみのち）郡鬼無里（きなさ）村にも遷都伝承があり、ここ長野県上田市常田地区と同様に、三野王（みぬおう）と下采女筑羅（しもうねめちくら）の二人が天武天皇十三年（684年）に鬼無里に視察に来たということです。

[5]大化３年（647年）に制定された「十三階の冠位」は、「大織・小織・大繍・小繍・大紫・小紫・大錦・小錦・大青・小青・大黒・小黒・建武」の順になっていました。従って、小紫と小錦は冠位を表します。ここの小錦はお相撲さんではありません。

[6]この碑文を読むと、「将門が兵を挙げ、京に上ろうとして上田まで進軍してきた。その将門の軍を、平貞盛と他田真樹が戦をして上京を食い止めた。」というような意味に取れます。つまり、将門は京に上って、東国だけではなく日本全国を支配する意欲があったように、これでは読めてしまいます。しかし、これは間違いです。2004年6月30日にNHKテレビで放送された「その時歴史が動いた」第184回：もう一つの日本を創(つく)った男ー平将門　東国独立政権の謎ーを見ても、将門にそのような全国制覇の意欲はなかったようです。事実は「将門記」などによれば次の通りです。承平天慶の乱は、平将門が、常陸国の国司である平国香を、討ったことから始まります。国香の息子である平貞盛は、将門の謀反を朝廷に訴えるために京都へ向かいました。貞盛が京都へ向かったことを知った将門は、後を追いかけて、信州上田の国分寺河原付近で追いつきました。この時の戦火で信濃国分寺や科野大宮が焼失したのです。この戦いに勝って京にのぼった貞盛は、朝廷へ将門の謀反を訴えました。そこで朝廷の宣旨を受け朝廷側に付いた藤原秀郷らによって攻められ、将門は朝敵として討ち死にしました。

従って、この碑文は、残念ながら、史実を誤認していますのでここの部分は訂正すべきものと思います。

[7]華表とは、古代中国で宮城や陵墓の前に建てられた木柱あるいは石柱のことです。華表は日本の鳥居の中国語訳で、ここでは鳥居と同義です。

[8]1362年に現れた大彗星でGriqua（グリカ）彗星のことのようです。この彗星は「太平記」にも記載されていて、当時天変地異が起こる予兆ではないかと恐れられたそうです。そのため、足利基氏は関東（鎌倉）管領として、関東地方の無事を祈り科野大宮でお祓いをしたと考えられます。

以上のように、この碑文には、信州の歴史や日本の国が成立した当時のことが書かれており、本当に面白いものです。一度、長野県上田市常田にある「科野大宮」さんを訪ねて、碑文を読んでみて下さい。きっと感動すると思います。

Column

科野大宮さんの御神木の高さ？

2004 年 2 月 20 日 太田和親

信州上田の科野（しなの）大宮さんの社殿の裏、右手に、ものすごい大きな木（周囲 29 尺=8.8m）の、切り株（高さ 1 丈=10 尺=3m）だけが今も残っています。見たこともない大きさの切り株で、驚きます。約 300 年前までの 1500 年間そこで立っていて、巨木の御神木として江戸時代の初めまで、大変有名であったそうです。「信州の縄文杉」といったところでしょうか。正確には「信州の弥生ケヤキ」ですが・・・。その御神木の影は、朝には諏訪部まで届き、夕べには信濃（しなの）国分寺まで届いたというのです。

そこで、諏訪部の向源寺橋（距離 2480m）と信濃国分寺（距離 1540m）からの仰角を 4 度として計算すると、それぞれ御神木の高さが 173.4m と 107.7m という、とてつもない高さになるのです。どなたか地元で言い伝えられている高さに関する他のうわさを知りませんか？また、どなたか上田の北緯 36 度 23 分で冬至の日にという仮定で、正確にこの御神木の高さを影の長さから計算できる方、計算やってみて頂けたら有難いです。

日本書紀には、「昔、近江の国（今の滋賀県）に巨木がありその影は朝にはちぬの海（大阪湾）まで届き、夕べには伊勢湾まで届いた。その影が農業の支障になるので住民がこれを切り倒すのを認めて欲しいと国に陳情があった。」との記述があったのを思い出しました。日本書紀のはスケールが違いますが、科野大宮さんのこの巨木も同じように大変興味深いですね。

農業が弥生時代とともに広まっても、神社の木は切らないのが日本人の昔からの習慣なので、このように巨木が残ったということでしょう。それならば、科野大宮さんの出来た時期が判らないと、科野大宮さんの史跡指定説明文に書いてありますが、私は、この巨木の樹齢から考えて、多分 1800 年くらい前に出来たのではないかと思います。1800 年くらい前といえば卑弥呼の時代あたりですね。ここ上田に、最初に来た弥生人は、諏訪部の高橋近くに有る標札によると、諏訪族だったそうです。

この御神木から、いろんなことが想像されて、古代のロマンを感じます。

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。
次号発行までのお知らせは、繊維学部図書館ホームページ
（http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/textiles/）
をご覧ください。　（ホームページが新しくなりました！）

⇒ 開館日・開館時間を拡大しました！

利用者の皆さまからのご要望に応え、2009 年４月から開館日・開館時間を大幅に拡大しました。赤字が、拡大した時間です。

	平日　（月～金）	土曜日	日曜日
授業期間*	８：４５～２１：００	１０：００～１６：００	休館
試験期間	８：４５～２１：００	１０：００～１７：００	１０：００～１７：００
長期休業中	８：４５～１７：００	休館	休館

＊　授業期間：授業開始前の１、２週間、試験終了後の１、２週間を含みます。

⇒ 「図書館オリエンテーション」参加者募集中！

◎新２年生のための図書館オリエンテーション
図書館の使い方を知っておくと、今後の学習におおいに役立ちます！！
随時受付けていますので、ぜひご参加ください。

◎研究室所属学生のための図書館オリエンテーション
これからの研究に、図書館をより活用していただくため、下記の期間、受け付けています。ご希望の場合は、研究室ごとにお申込みください。
４月１３日（月）　～　５月２９日（金）

⇒ ＡＣＳ／ＡＰＳ／ＡＩＰの電子ジャーナルを開始しました

繊維学部がかねてより要望を出しておりました電子ジャーナルが、２００９年より全学で導入されました。以下の学会のジャーナルについて、初号から最新号まで論文全文を見ることができます。信州大学電子ジャーナルリス A-to-Z からご利用ください。

⇒ http://atoz.ebsco.com/titles.asp?id=shinshu

・American Chemical Society
・American Physical Society
・American Institute of Physics

図書館日誌

（H20 .4 月～H21.3 月）

＜会議など＞

H20.	5/19	図書委員会（第１回）
H20.	5/12	全学図書関係主査会議（第１回）
H20.	5/23	附属図書館館長会議（第１回）
H20.	6/12	附属図書館館長会議（第２回）
H20.	7/16	図書委員会（第２回）
H20.	7/17	全学図書関係主査会議（第２回）
H20.	8/25-29	図書館蔵書点検
H20.	9/11	附属図書館館長会議（第３回）
H20.	9/17	図書委員会（第３回）
H20.	9/24	全学図書関係主査会議（第３回）
H21.	2/3	附属図書館館長会議（第４回）
H21.	3/3	図書委員会（第４回）
H21.	3/4	全学図書関係主査会議（第４回）

＜オリエンテーション＞

H20.	4-5 月	研究室向けオリエンテーション　（23 研究室）
H20.	4/22	文献データベース「JDreamⅡ」説明会（参加 53 名）
H20.	4/24	機能機械学科オムニバス授業　（出席 44 名）
H20.	10/28	SciFinderScholor　講習会（応用編）（参加 42 名）

編集後記

“編集”なるものを初めて経験しました。ノウハウがわからない！時間がない！と苦しんだ一方で、こんなにもじっくりと文章を読んだり、何を書こうかと思いを巡らせることは日常生活ではなく、とても新鮮な作業でもありました。

「ささえ」では、高須図書館長より、３年間の図書委員会としての活動、成果を報告いただきました。私たち職員にとっても、日々の仕事への達成感と今後の課題を考える機会をいただきました。ありがとうございました。

　また、太田先生には随筆を３本ご寄稿いただきました。「科野大宮の碑から上田の歴史を考察」では、その昔、この上田に遷都する計画があったとのこと、驚きました。この計画が実現していたら、今の上田市は？と想像すると、とても興味深いです。今回の随筆につきましては、「Library」への掲載が大変遅くなってしまいました。太田先生にはお詫びとともにこの場を借りて御礼申し上げます。

　図書館では、利用者の皆様の声をお待ちしております。

E-mail:　jfg0100@shinshu-u.ac.jp